

だけに、実に惜しまれるところである。

いずれにせよ本書は日韓巫系文學研究史上

の金字塔の一つであると言つてよいだらう。

この方面的研究にとつて本書は量り知れぬ程多くの寄与をなすものである。著者の長年に

亘る労苦をねぎらうとともに、今後のさらなる研究の發展を心から期待したい。

(三弥井書店 本体九八〇〇円) 平成十三年

## 中世の浦島太郎

書評 林 晃平著

### 『浦島伝説の研究』

## 三 浦 佑 之

二十年にもわたる林氏の浦島研究の一端が、書下しの序章を除いて既発表論文二十一本全七章からなるA5判五〇〇頁の大著として姿を見せた。その厳密な文献探索と精密な分析作業をもとにした論述群を前にした私は、敬意と驚嘆を感じるばかりである。

扱われている時代でいうと、その全体は、中世（第一～三章）・近世（第四、五章）近代（第六、七章）に区切ることができる。よく知られている通り、浦島物語は八世紀の日本書紀・風土記・万葉集をはじめ、さまざまな文献に書き伝えられており、林氏も言うように、「古代から現代まで一貫して見通すこ

とのできる浦島伝説は、文学史の指標の役割を果たすことが可能」（序章「浦島伝説略史」）な作品である。そして、本書が対象としているのは、その後半部分に相当する。なぜ、中世以降にこだわるのかといえば、おそらく資料がケタ違いに多く、そこに林氏の興味が集中しているからだろう。

ここでは本書の展開に即してその内容を紹介し、あわせてコメントを添えるというかた

第一章 浦島太郎誕生以前（第一節 浦島伝説と「古語」の行方／第二節 おもに漢文で記述された古代の浦島物語が大きく変容するのは、中世に書かれた御伽草子であるというのは周知のことだろう。そして、林氏の関心もまずはそこに注がれていることは、以下のような目次をみれば了解される。

第一章 浦島太郎誕生以前（第一節 浦島

伝説と「古語」の行方／第二節

『源氏物語』と浦島伝説）

第二章 浦島太郎誕生の周辺（第一節 歌学書の浦島伝説／第二節 浦島太郎誕生の諸問題／第三節 浦島太郎と四季）

第三章 所謂御伽草子「浦島太郎」（第一節 所謂御伽草子「浦島太郎」の諸本／第二節 所謂御伽草子「浦島太郎」の流布本）

中心は第三章にあり、そこでは御伽草子の諸本の分析をもとにした分類（第一節）と、渋川版御伽文庫を代表とする流布本系諸本の对照表をもとにした比較検討（第二節）がなされ、御伽草子「浦島太郎」が、「多数の補

完作業に依つて完備された本地物の読み物』

開する契機を見出しているのは納得できる。

に成長してゆく過程を浮かび上がらせる。そしてその前提として、第一、二章では御伽草子「浦島太郎」の前史ともいえる中世的な浦島物語に関する諸問題が論じられる。

続日本紀（嘉祥二年三月）の仁明天皇の四十の賀に献上された長歌（浦島を歌う）にみられる「古語」の伝承を指摘し、その長歌に

「奈良の僧」たちが閑写していることの重要な性を述べ（第一章第一節）、源氏物語の賢木の巻に収められた和歌（ながめかるあまの住みかと見るからにまず潮垂るる松が浦島）にみられる「松が浦島」の解釈を通して、「単純に『浦島』のみで浦島伝説が想起される条件が整ってきた」ことを指摘する（第一章第二節）。

ここでは、平安朝における「浦島伝説」の  
浸透と広がりを見出し、御伽草子へと向かう  
環境が準備されてゆく足取りが解明される。

しかし、そこで扱われているのは貴族社会における受容の広がりや浸透であり、それらが階層的にも空間的にも、どのような広がりをもつたのかはわからない。ただ、万葉集を別にすれば漢文でしか享受できなかつた浦島物語が、多様な表現とかたちをもつて作品へと展

第二章第一節では、日本書紀や風土記の浦島を「古代における伝説」とみなし、平安末期から中世への歌学書の概観を通してその受容のさまを跡づけ、中世において神として祀られることと浦島太郎の名を持つこととの相関性を追いながら、仏教色彩が徐々に濃さをま

ある異界（蓬萊、龍宮）の無時間性について、まったく言及しないからである。四方四季の景が浦島物語（御伽草子）に受容されたのは、いうまでもなく自然な読み方ではないのか。

近世の浦島太郎

る。この部分に収められるのは以下の諸論である。

第四章 浦島乘亀譚の成立（第一節 浦島乘亀譚の周辺／第二節 蓼亀の登場）

節 祭礼の中の浦島伝説

第五章 浦島寺の成立と展開（第一節 神奈川浦島寺の興亡 / 第二節 神奈川浦島寺略縁起の変遷 / 第三節 木曾

浦島寺の成立の周辺

巖谷小波の「浦島太郎」(日本昔嘲)に代  
表される近代の児童読み物や教科書における  
浦島太郎が、近世にすでに準備させていたと  
いうことを論証するのが、この二つの章の主  
題である。まず第四章では、浦島が亀の背の上

乗つて龍宮に行くという語り口の成立が論じられる。さまざまな資料を検証することで、龜に乗る浦島が十八世紀の初めには存在したことと明らかにするとともに、「常に変化流動の中に浦島伝説」はあり、「往復が龜に」元化される前には、さまざま乗り物に対しての展開があった」という（第一節）。その龜に乗るという発想が生じる背景に、近世に流行した「長寿の瑞祥」としての蓑龜の出現があるとみるのはたいへん興味ぶかい指摘である（第二節）。

おそらく、近世における市民社会の成立とともに生じたもろもろの要素（御伽草子の流行による物語の大衆化、蓑龜の流行、旅行ブームによる名所図会類の出現など）が、浦島太郎の広がりや浸透に大きく関わっていたのは間違いないことだと考えられる。そのあたりの事情を、林氏は厳密な考証によって追跡しており納得させられる。

第五章の神奈川と本曾とにあつた浦島寺の検証も、右と同様の意味で示唆的な論考である。どちらも十八世紀初頭から中期あたりに浦島太郎と結び付いていったらしいことが、寺社の作った略縁起や名所図会などをもとに解明される。それらが近世の出版や観光と関

わっているというのは重要なことであり、

書の浦島伝説

「伝説は宗教を利用することにより、更なる成長を遂げ」、「宗教の側も布教活動に積極的に利用して展開をはかつていく」という「文学と宗教」との「相互に発展」する関係の指摘は注目してよい（第二節）。

これを今風にマークティング戦略と呼んでみよう。すると、林氏は論じていないが、丹後半島の浦神社がその先駆けをなす寺社として平安末期には浦島を利用していたということも想起される。浦神社でも各地の浦島寺でも、不老不死（あるいは長寿）の薬やお札とともに、その靈験が宣伝されていたのだろう。

近代の浦島太郎

本書の末尾二章の内容は、以下の通り。

第六章 近世から近代へ（第一節 浦島太郎と祝言 / 第二節 明治赤本「浦島太郎」 / 第三節 「二つの英訳「浦島伝説」 / 第四節 嶩谷小波と明治の浦島伝説）

第七章 近代における浦島伝説の展開（第一節 二人の浦島次郎 / 第二節 森鷗外と浦島伝説 / 第三節 国定教科品）

この章では、近代において浦島太郎がどのように受容され変容していくかを明確に描ききつていて、それは今までの浦島研究には比べるものもない独自な仕事であり、林氏の功績は大きい。また、用いられている資料が写真版などで掲載されているのもありがたい配慮である。そう評価した上で気になる点をあげれば、嶩谷小波の果たした役割を、「連綿と続いている浦島伝説の流れの中の一作

島ばかりが強調される近代の浦島太郎に関して、本書では、その周辺における広がりと浸透が詳細な資料の紹介とともに論じられていて、具体的にいうと第六章では、中世的な「めでたい」（神になる浦島）話から児童読み物や教材としての「因果応報の認識と道徳的・感情の養育」への変化を跡づけ（第一節）、近世的な世界を引きずった明治初期の赤本を検証することで、「嶩谷小波の昔懐の内容のほとんどは彼のオリジナルではない可能性」を指摘し（第二節）、チエンバレンと片岡政行による英訳「浦島」の成立事情やその内容が論じられる（第三節）。

興隆と共にその時流に乗って「昔話を大量

に普及させた」ことだけだ（第四節）とみな

している点である。この発言に対してもしば

らくの留保を表明したい。なぜなら、巖谷小波という人物が近代国家の国民教育における昔話の利用に大きく関与していたのではないかと考えるからである（林氏はふれていないが、第一期国定教科書への小波の関与も考えなければならない）。

第七章では、浦島太郎を題材とした近代作家たちの作品を取り上げ、幸堂得知と幸田露伴との影響関係（第一節）、「作者の独自の構想と丹念な調査によって書かれ」た森鷗外の戯曲『玉篋両浦嶼』（第二節）、「教訓的な側面と文学的な側面」とを持ち、「その二つが教育という場において絶えず葛藤を起こしていいる」国定教科書の浦島太郎のありよう（第三節）などが丹念に論じられている。

### まとめ——私的な感想を含めて

以上、私見をまじえながら大部の著書をおまかに紹介した。あるいは、林氏の言わんとする大切な部分を見逃しているのではないからと恐れつつ、紹介の最後に、私の抱いた違

和感についておきたい。

その違和感とは、書名にある「浦島伝説」という呼称である。伝説とは何かという説明

をまつたくしないままに、この呼称を用いるのはまずいのではないか。「先学の最近の著作」（五〇頁）にならって伝説の語を使うという断りがあるだけでは林氏の立場を理解することはできないし、「よく知られている」ことを理由に、「古代の伝説」と林氏が定義

する日本書紀・風土記・万葉集の浦島にまつたく言及しないのも、どういう意図があるのか理解に苦しむ。後世の「伝説」化は明らか

だが、その起源に位置する古代の浦島を「伝説」と言うなら、どのように伝説であつたのかということをぜひとも論じてもらいたいと

いう思いが最後まで消えなかつた。

こんな言い方をすると、古代の浦島子の物語を、伊豫部馬養『浦島子伝』から始まる創作小説（浦島物語）であるとみなす評者の言

いがかりに過ぎないと思われるかもしれない。しかしそれが正しいか否かは別にして、拙著『浦島太郎の文学史』（五柳書院一九八九年）の創作小説論は、いささか古びてはいるが「最近の著作」のなかではもつとも普及した見解である。それをきつちりと批判し

た上で伝説論を展開しないと、せっかくの大

きな仕事の立脚点が脆弱なものにみえてしま

うのではないかと危惧する。

もうひとつ欲を言わせていただきと、先に

ふれた巖谷小波や国定教科書が果たした、近代国家における役割を視野に入れた考察があ

ればと思った。林氏の仕事の全貌を強調するためには、小波の役割が過小に評価されてしまつたというのは理解できるが、わたしたちの浦

島太郎を検証するためには、巖谷小波と国定教科書についての明確な位置付けが不可欠だと考へるからである。

そうした意味でも、林氏には一般書のかた

ちで新たに「浦島太郎の文学史」を書いてほしいと願つてることを、僭越ながらつけ加えさせていただく。ほかに同様の仕事ができ

る人はいないのだから。

（二〇〇一年一月、とうふう、一一〇〇〇円）

（みうら・すけゆき／千葉大学）